

私の頭の中のまだエンピツ③

そだちと臨床研究会 川畑 隆

確からしいところ

エビデンスと想像力

コンプライアンス（守るべきもの）を重視し業務が恣意的に流れないよう、業務に客観性をもたせるための工夫が子ども家庭支援業界にも浸透していて、それが業務マニュアルやアセスメントシートなどの存在に表れているように思いますし、支援のアプローチを選択する際にもエビデンス（証拠）を重視するように言われています。

「リンゴ」という言葉がリンゴの実体を表しているように「表すもの（言葉など）・表されるもの（実体や実質）」という枠組みで考えると、アセスメントシートに描かれたものは事例の実体を、また心理テストの結果（反応）は被検者の心理の実体を表すものです。しかしこの類のことに關しては、それで表されているものは実体そのものではありません。実体（表されるもの）を探るにはアセスメントシートや心理テストの結果（表すもの）から推測（想像）しなければなりません。人間の複雑な実体が単純なシート一枚で自動的に表されることはありません。ところが、そ

の推測は得てして最小限のところとどまって、結果がそのままあたかも実体かのように扱われがちです。そして、その具体的な実体ではなく記号の集まりのような結果がエビデンスとされ、それにもとづいてなされようとしたアプローチは、事例の丸ごとの理解に届いていない分、ほんの部分的要素への対処に過ぎないものになってしまっています。つまり、アセスメントシートでも心理テストでも、得られた情報が何を示すのかの事例の全体像を仮説するための想像力が必要になってくるのです。想像力ということでも主観的で科学的エビデンスとは距離のあるものに感じられるかもしれませんが、対人援助においてはこの想像による仮説力が欠かせませんし、エビデンスは推測の部分を除かないと思います。一見科学的だとみられる統計学的処理の結果も「統計仮説」にもとづいているのです。

わかっていることを疑う

たとえば新版K式発達検査 2020 への子どもの反応を目にした時、その子の内的な状況（認識や感情の発達や心的状況）を仮説します。そしてその内容を言葉で説明します。ところがその説明する言葉が自分自身を「そうなんだ」と納得させられるような論理でできていたとしても、それは本当に子どもにとってもそのとおりなのでしょうか。私たちはもちろん、検査の結果を既存の解釈仮説にただあてはめるのではなく、子どもの側からの目線でわかりたいと思い、自分の人間の発達や心についての知識と想像力や表現力を駆使してわかっていきます。しかし、それでも勝手に決めつけているんじゃないか、子どもはそれとはズレた状況なのではないかという疑いを持ち、自分のことを内省して喋ってくれたりはしない子どもの実

際に少しでも近づきたいという思いは消えません。検査の経験をたくさん積んでいる人でも、自分の検査の結果の読み方という枠を被り続け、視野が限定的で他が見えなくなってしまうっているかもしれません。

また、発達・知能検査では、被検児のパフォーマンスを他の子どもたちとの比較から評価する視点が用意されていますが、パーソナリティ検査の場合は一部を除いてその用意度が発達・知能検査ほどではありません。心理テストを受けるのは児童相談所でいえば相談があつた子どもで、子ども自身も何らかの課題を抱えているかもしれないとして実施されます。そして、その結果は往々にしてその課題と関連づけられて解釈されることになります。パーソナリティ検査上の特徴は、あたかもその被検児以外にはそのような特徴はないかのように、被検児特有のものとして捉えられがちな側面はないでしょうか。そのようなことも検査結果を読む時の落とし穴になることがあります。

さて、性被害等を受けたり加害側にまわる子どもたちの中にトラウマや育ちの歪みを想定し、子どもの言動をそれらと関連づけ、癒す方法論や愛着理論にもとづいた発達促進の術が呈示されたりしています。そしてその方向に進めないと「（業界の最前線から）遅れている」かのように思わされてしまうような状況を周囲に感じることがあります。もちろん、そのやりかたでうまくいけばその方法は役に立っているわけで続けてゆけばよいと思うのですが、事例はさまざまです。個々の子どもの実態から出発したはずの思考が一般論によってだんだん目の前の子どもの実態から離れていく、あるいは子どもの実態把握自体にすでにその「色」が濃く反映されていたりするのであれば、そこはより詳しい個々の把握に戻る必要があるのではないのでしょうか。

子どもは、おとなが意味づけたいくなるような発言や様子を示したり、解せない行動をとることもあるわけですが、それまで家庭や地域で経験してきたことと同様に、周りとの関係性によってそう応えることで自分を守れると思い込んでいるのかもしれないし、大人が想定するような複雑な回路によってではなく、もっと単純な理由でそのように振る舞っている場合もあるでしょう。虐待を受けてきた子どもを目のまえにした時、私たちが同様の体験をしていなければ、目一杯に想像を働かさなければなりません。その時に定番の想像の仕方に頼りやすいわけですが、その定番の枠を一度外してみるようなことも自分に課すとよいのではないかと思うのです。大人が注目するところとは違うところに子どもは耳を傾けてほしい場合もあるでしょう。そういう意味で、大人の描く筋書きにはあてはまらない逞しさを子どもは持っているのかもしれないし、そこを見つけるためにも私たちはできるだけいろんなことからフリーでいていいのではないのでしょうか。ここに書いたことは、私たちおとなが自分で自分のことを評価して語るときにも関連してくるように思います。自分のことを「ここがダメなんだ」と説明しても、実は「そこがいいんだよ」と相手から返されることも多々あるでしょうし、自分自身の中からもそういう反論が出てきたりします。私は自分の優柔不断が嫌いで、決断できることに憧れていました。でも今は、優柔不断の「いろんな思いを同時にもつことができる」側面に重宝しているのが実際のところですよ。

確からしいところ

「そうかもしれないがそうじゃないかもしれない。そうじゃないかもしれ

れないがそうかもしれない」とは私がよく口にするフレーズで、いつもそう思うようにしています。自分の考えは「正しい」と思わないとなかなか発言できないものですし、発言したことは「正しい」と主張したくなりません。でも正しくないかもしれません。また、それほどの自信がなくても発言することがあつて、少しの反論にあうとすぐに自分の考えを引つ込めたりもします。でもその引つ込めた意見は正しいかもしれません。

「正しい」と書きましたが、「正しい」「ホント」「真実」……これらの言葉は人間の心がからむ事柄に関しては実のところそのとおりかどうかよくわかりません。少なくとも、神様じゃない限り「これが真実だ」とは限定できないでしょう。そして、対人援助職はホントや真実を知りたいというよりは相手の役に立ちたいわけで、役に立つのなら何でもいいと思うのです。「役に立つ」とは、たとえば「人間の成長」という概念に比べて薄っぺらだという評価を受けがちですが、人間の成長ばかりを促そうとして結局は助けられないよりは、何が効いたかがあいまいでも助けられたらいいのではないのでしょうか。もしかして役に立った何かには、少なくとも役に立ったのですから、人間についての理解を深めるまだ見ぬ「宝」が秘められているかもしれないのです。

私たちは相手の役に立ちたいと思って事例の中にある諸情報を検討するわけですが、事例の中の何に向けてアプローチするか但至少でも「確からしい」と思える、手ごたえのある見解に迫ろうと努力しています。家を建てる時の設計図と同じようにアプローチの抛り所が必要だからです。もちろん「確からしい」というのも、「そうかもしれないが……」です。

(了)